

1881年の*Sport*とアイルランド

Paul Rouse*,
訳／榎本雅之, プラデュンナ・ダワリカル**

緒言

1880年のクリスマスイブ、ダブリンで新聞*Sport*の発行が開始し、50年間にわたり、すばらしく、そしてまた一風変わった見解をアイルランドの人々に提供した。この新聞は、1880年代のアイルランドのスポーツ活動の驚くべき範囲を記録し、スポーツ活動を行った共同体を照らし出した。本章は、最初の一年間となる1881年の*Sport*について明らかにし、どのようにこの新聞が存在し、成長したかについて考察する。

19世紀英國の重要な社会変化は、多くの人々に経済的余裕と余暇時間を与えた。工業化、都市化、技術進歩、社会基準の変化や前例のない急速な人口増加は英國人口の大部分を占める層の生活を変えた。英國人の人口は1801年の1,070万人から、1911年には4,010万人に増加した。中でも、その人口が増加した場所が重要な要素だった。1801年に都市に住む英國人は3人に1人だったのが、1911年にはその割合が、5人中4人に増加した。都市の大衆は、その日常を牧場ではなく、工場や事務所で過ごした。遊びの傾向はこの新たな社会に適応するよう変えられた。前の世代の伝統的なレクリエーションは、近代的な成文化されたスポーツとして都市の場面に作り直された。サッカーは人々のゲームとして着々と定着したが、ラグビー やクリケットもまた幅広く一般的な人気を持っていた。新しく生まれたスポーツが成長しただけなく、競馬のように昔から定着していたスポーツも、全ての階級に人気があった。増大するスポーツの商業化は、個人が自由に使える所得が中間層や労働者層に拡大した現在の主要な特徴である社会を反映している。アマチュアやプロの選手を巻き込んだ定期的なスポーツ大会は、観衆を計画的に建設されたスタジアムに引き込んだが、その多くは公園や増加する郊外のパビリオンでゲームが行われた。19世紀後期の大英帝国の権力と威光は、アングロサクソン中心のスポーツの普及を世界中に促進した。その過程は複雑なものだが、結局、英語の試合の規則は、英國が近代スポーツ界の産婆であると主張したことを広めた。¹

2つの島に1つの王国という関係は、アイルランドの近代スポーツの発達期に象徴されている。2つの国を結ぶ地理と政治によって文化的交流が進み、旅行や商売の増加に伴ってその交流がさらに深められた。英國スポーツの拡張の人口統計学的、経済学的な特徴は、その隣接した島と共有されなかった。しかし、アイルランドは英國とは全く異なるもので

* University College Dublin

** Sakai International Patent Office

はないものとして、英國のスポーツ界から分離されていた。アイルランドは英國のように工業化されず、人口が減少傾向にあったが、ある地域-特に東海岸の都市部-を中心に、田舎のアイルランドの生活から英國の都市の生活に変わった。1841年には、アイルランド人のたった15パーセントのみが町や都市に住んでいたが、この数値は1914年に35パーセントに増加する。ベルファストの工業化は、造船業などの大きな成功によって、都市の定住者を1845年の10万人から1914年の40万人に増加させた。同時期、ダブリンの定住者は25万人から30万人への増加で、このゆっくりした増加は異なる作用を引き起こした；変化は生じたが、それはあまり強烈でなく、したがって異なる面を持っていた。これら帝国の拡大する都市は、英國スポーツ界の多くの特徴を取り入れた。ベルファストは、プロのサッカーリーグや労働者階級のスポーツ文化のある英國の北部工業都市に非常によく似ていた。静かなダブリンの郊外は、テニスやゴルフクラブの本場となり、富裕層の学校-英國の対応する学校をモデルにまねて-は、ラグビーとクリケットのためのピッチを作った。

アイルランドの農村部では、人口の減少そして工業化の失敗の関係はスポーツの発展にとって有害であることを示さなかった。僻地では小作農が大昔からある堂々とした生き方を大切に守ってきたが、それは農村生活の現実とは大違いだった。近代スポーツ組織がスポーツ界に再び出現し始める19世紀の後半、アイルランドの農村部は大きな変化の苦しみの中にあった。農村部の階級構造が変わろうとしていた。農地の傾向は、続く世代が英國やアメリカの都市にボートで亡命するような、情け容赦のない状態だった。結婚と出産の割合は低下し、結婚年齢は上がった。20世紀の初頭までに、アイルランドの農業従事者は人口の45パーセントだったが、その本質的な点は変わっていた。多くの農業労働者は、大飢饉後、劇的に減少し、その階級の人々は、徐々に農村部から姿を消していった。農地の面積は大きくなり、新たな穀物と近代的な農業手法の導入の両方が、収入を増加させた。実際に、1850年と1914年の間に、農作物の生産高の向上と専業農家の減少があり、農村の収入に大きな増加がある。² 多くの人々が貧困の泥沼にはまっていたが、その他の人々は、19世紀の進歩による収入の一定の増加を楽しんでいた。小作農は農村社会における最大の社会集団となり、家畜やバターの価格が増加することから大きな利益を得、比較的快適な地位だった。さらに、農村アイルランドの文化は、幅広い世界の変化によって形作られた。農村アイルランドは近代社会から孤立したわけではなかった。現地の人々が移住した共同体と結びついたのが、鉄道網の拡大などの発展が大きな理由だった。1850年にたった65マイルだった鉄道網が、第一次世界大戦の勃発までにアイルランド中に3,500マイル以上になった。国内の辺鄙な場所でさえその恩恵を受けた。徐々にではあったが、農村アイルランドは、工業化された英國の影響を確実に感じるようにになっていった。³

19世紀後期のレジャー界の一面として、新聞は幅広い読者層を獲得し始めた。英國のようにアイルランドでは、印紙税の廃止と印刷技術の発展によって、より安価な新聞の生産が促進された。交通手段の発達は効率的な配布を可能にし、識字率の向上は-1911年までにアイルランドの88パーセントの人が読み書きをできた-潜在的な読者として、新たな層

を提供した。1880年までに、英国では、2つの日刊のスポーツ専門紙—*Sportsman*と*Sporting Chronicle*—が発行され、1884年に3番目の新聞として*Sporting Life*が加わった。それぞれの新聞は1ペニーで、競馬を中心に種々のスポーツに関する記事が掲載された。これらの新聞は、スポーツという拡張し続ける重要な社会現象の完全な記録を残そうとした(Mason, 1993)。1880年代の中頃まで、これら日刊紙は、1.5ペニーよりも安い価格で、その日の試合結果や報告記事を土曜の夕方に英國中の都市に届け、スポーツまたはフットボールの「特集」を行った。

1880年に、アイルランドは日刊のスポーツ紙を支援できず、「土曜の特集」を保証するスポーツの試合も定期的に行えなかった。現れたのは、アイルランドらしい妥協「週間の特集」である。最初にアイルランドで発行されたのは、狩猟と馬術競技中心で構成され、英國とアイルランドの穀物と家畜市場に関する記事もある *The Irish Sportsman and Farmer* だった。その16ページの価格は4ペンスで、紳士的なレジャーの反響を促進した。スポーツ界が変化し、新聞は価格を下げ、より庶民向けに再構成しようと努めた。それは失敗だった。1892年の廃刊まで、*The Irish Sportsman and Farmer* は、その始まりからのエリート主義の雰囲気を払拭せず、拡大する庶民のスポーツ時代到来の機運を捉えることができなかつた。

対照的に、その形式、内容、価格で、*Sport*はヴィクトリア時代の一般紙の潮流に適応した。それはダブリンにおいて最大の売上をほこるアイルランドの日刊紙 *Freeman's Journal* の土曜版として現れた。⁴ *Sport*の初期の発刊日は水曜だったが、すぐに金曜の夜に仕上げられるようになり、土曜の朝の列車でアイルランドの至る所に輸送された。自称「万人のための新しい週刊スポーツ機関 (New Weekly Sporting Organ for the Million)」、または「The Irish Pink' Un」は、4ページに合計28のコラムがあり、編集長が言う「庶民の価格」1ペニーで販売された。(Sport, 24 Dec. 1880)

第一号は、「このスポーツを愛する国の信頼でき安価なスポーツ情報誌の欠乏は何年もしみじみと感じられていた」という明快な新聞の狙いで構成された。優先されたのは、競走に関するニュースだったが、「狩猟、ヨット、射撃、クリケット、フットボール、ポロなどのスポーツの各種目は、我々のスタッフの関心から抜け落ちてはいない」(Sport, 24 Dec. 1880)。その初版は、発行した10,000部全てが売り切れたと述べられている。証明することも難しいが、その報告を信用することもまた難しいのである (Sport, 1 Jan. 1881)。発行部数を上乗せて報告することで悪評高い新聞産業にしても、10,000部という数字があまりにも大きすぎるようと思われる。何にせよ、幅広い読者を獲得したことは、記者が正確な記事を書いたことによる。1881年の正月に2回目の *Sport* が発行された時、アイルランドと英國中の新聞に掲載された賞賛の記事を載せた。例えば、*Cork Herald* は、*Sport* が「アイルランドのスポーツの顧客を現在、ほぼ独占している安価な英國のスポーツ紙」を侵害すると断言した。また、その競争相手と思われるマンチェスターを地盤とする *Sporting Chronicle* は、そのダブリンでの対応する新聞の出現を喜び、高価な新聞の時代が終わった

ことの証明であると述べ、ライバルではなく、仲間だと感じていた(*Sport*, 1 Jan. 1881)。安価ということだけが成功の保証ではなく、それが市場の開放-より正確にいようと、市場拡張の可能性-と結びついた事実を別にして、*Sport*の成功は、その内容の質によるものだった。

Verbose journalists, quality drinking and a gentleman's corset 饒舌な記者、良質の飲酒そして紳士のコルセット

その時代の形式を保ったことによって、*Sport*の記者は記事がくどく、利己的で、常に学識の顯示になり本筋からズレがちであった。彼らは長い文章のわかりにくいパラグラフを生み出す教養のある人たち-彼らは常に男だった-だった。代表的な例は、競馬について書いていた花形のコラムニスト「ラックス」だった。彼は、全ての近代的なものは悪という信念を持った目立った変人だった。ラックスは、Punchestownのような古い伝統的な競馬場が衰退したカウンティや、成長を続けるCurraghまで至る所の小さな地方の大会にも出かけ、種々様々な全ての大会の記事を書いた(*Sport*, 27 Aug. 1881)。ラックスは書いた。

小さな集団が提携することによる欠点はほとんど避けられないようと思われる。ある場合にとって、良質のコースは、調達が困難であるかもしれない。一流の競技者は小額のステークスに出場したがらず、したがって、その欠場は無理もない。しかし、危険なコースが準備されること、そして時間厳守の習慣が完全に無視されることは、言い訳することさえできない。(中略) 昔からのスティープルチェイス-下手な運営の地方の大会の頻発によって、有害に作用する娯楽-の傾向を避難している何かがあると確信している。

彼は、それらの地方の大会の多くが「スポーツの項目に分類されることに適していない」や「もし私自身の気持ちを動かせられるなら、私はここでそれらの小さな大会を気づかずにつり過ぎたことにしたい」と述べた。

当然、ニュースの伝達や広告の需要は、小さな大会を報道することによって、ラックス自身をその殉教者にさせた。彼の反応は冷たく客観的なものだった。もし、彼が苦しまれていたなら、そんなに孤独で行わなかっただろう。いつも全国に対して酷評を行い、見事な原稿を作り出した。Frenchparkでの大会で、カウンティ・ロスコモンは、「完全な失敗だった(中略) 大会の興行者の意図をどうのように賞賛できるだろうか、私は、スポーツのパロディのようなことを行ったこの紳士達を奨励することはできない。また、もし彼らが今日の見せ物を改善できないなら、この試みはやめてしまったほうがいいかもしれない(*Sport*, 26 Mar. 1881)。」そして、ある読者がラックスからの辛辣な言葉の攻撃の厳しさに不満を言った際、新聞の編集者は「我々は見たことを書いており、すべきことを書いて

いるのではない(*Sportt*, 13 Aug. 1881)」と一蹴した。

それは彼が批難した人々をいらだたせただけだったが、ラックスの予想の素晴らしい正確さは、記事の横柄さに応じた。そして、もう一つ彼の成功した予想は、気取らない見出しのついた「ラックスもう一つの成功」であり、前の週のCurraghで14予想中10レースを当てた。彼は5ポンドのステークスで有用な指摘を行い、賭けをする人は最終的に61ポンド6シリング8ペンスを得てやめた(*Sport*, 2 Jul. 1881)。実際に、賭けは新聞の拡張にとって不可欠の手段だった。頻繁に当たる予想によって、アイルランドで大きなレースが開催される日の朝、新聞の販売において主導権を握り、ラックスに予想された馬は、*The Irish Times*や*Freeman's Journal*にも掲載された。しかしながら、予想を解読するためには、読者は馬が走った記事のそばに掲載されている暗号化された数字の載った前の週の土曜の*Sport*を購入しなければならなかった。

仮にラックスが予想を通して幅広く一般的な魅力を引き寄せていましたなら、新聞の断続的な論説もまた露骨に庶民的だった。コークの行政官がCork Parkのレース大会で全てのアルコール飲料の販売を禁止した際、新聞は批難した。これまでの大会で、酔っぱらいあるいは暴動の事実がないことを主張し、行政官に「レース間のビールとサンドイッチの伝統を認めること」を要求し、「禁酒の習慣を与えるための強い狙い」だと述べた。記事は、レース大会で酒を飲む権利を議会の法律で定められていることを主張したが、コークでのアルコール販売の禁止を避けることは不可能だと明らかにわかっていた。この記事は、「こってりした穀物」の入ったアルコールの小瓶をもって参加した人々全ての要求を集め訴えた。適切に、その瓶から注がれる液体には悪徳の責任はないことを述べ、司法をだまさなければならなかった不正行為にこそ責任があることを主張した。

これまでも競技場で酔っ払ってふらつく悪習のある人を見たことがないことに我々は驚かない。長い一日の間、レースコースで一杯のワインや、一本のビールのボトルを欲する立派な節度ある階級の人々に、飲むことを許可しないことは、自由の不条理な妨害ではないのですか？ (*Sport*, 20 Aug. 1881 and 3 Sep. 1881)

翌週、記事はCork Parkの大会がわずかな観衆の前で、たった数頭の馬の出場の中で行われたことを嘆いた。また、午後の間の「従順さ」とCork Parkで酒を飲むことが禁止されたことの懸念について書いたが、リムリックの治安判事が行ったよく似た訴えの報告があり、数ヶ月続く一連の運動の最初だった。その町の法廷で、副調査官Wiltonは、「この前のレースのごろつきによって引き起こされた暴動行為の結果」と「レース場で酒を飲むことにより、互いの頭をたたきあう痛ましい状況」により、リムリックのレースでアルコールの販売を禁止することを求めた。行政官たちは、ビールを除いた強いスピリットの販売の禁止の要求で分かれた。最終的な決定の記録はないが、*Sport*にとって、アルコールが飲めない裁判官の判断は馬に熱狂する人々すべてを不健康に陥れるに等しいことだった。酒を飲ま

せないことにより、人々は遠ざかる走る馬のひづめの音を永遠に聞くことができるだろう。「多くの人々の健康は、シェリーや赤ワインなしでは伸びることはないだろう。どれほど的人が、医者の指示により、興奮剤をとっているのか?」(Sport, 20 Aug. 1881 and 3 Sep. 1881)

アイルランドの競馬ファンにとって、健康の重要な問題であったアルコール飲料の議論だったのかもしれない、特に並外れた添加物に関する多くの報告があったことが、基準だった。しかし、公的な健康についての歴史家は、Sportの紙面に掲載されたあることに気づいた。その最初の記事は、ラグビーの試合で何人かが亡くなったことをうけて、スポーツに参加することの危険性に関する議論である。アイルランドラグビー協会(Irish Rugby Football Union)の幹事長(Honorary Secretary)であるR. M. Peterは、医学雑誌The Lancetから、ゲームをすることで相当数の人々が不具になる、または死ぬ可能性があるということを引用し新聞に書いた。「個々そして共同体の運動競技の疑いのない価値は必然的に起る時々の災難を相殺する」。実際に、新聞は「紳士のコレセット」の時代そして、「お互いを讃える感傷的な詩」を男達が書くことを知覚し、ゲームは女々しさを吹き飛ばし、前進するためのものとして必要不可欠だった。それは以下のように述べられている。

風通しの悪い密集した部屋での夜のダンスは、近代生活にとって、最も歓迎されず危険な行為で、「ラグビー」や「サッカー」のルール以上に多くの人を大いに殺す。朝方まで、ビリヤードやカードをして遊び、「BやS」を飲み、公的な場やクラブハウスで座ったまま殺された人々は、高潔さと勇気をもった突進によるスポーツをすることでたまたま死んでしまった仲間達が、この或はその娯楽の悪質の「恐るべき事例」として話されていたことを、警戒と思わない。(Sport, 1 Jan. 1881)

その上さらに、フットボール場で要求される技術は、その-最も特色のある習慣の中の一価値さえ否定され「過去のフットボールのキャプテン」からの手紙として示された。道を渡る時、馬車にほとんど敷かれそうになり、人は「古いフットボールの動き」によってのみ助かる。彼は何世代にもわたり、「私の命は間違いなくフットボールにより助かった(Sport, 8 Jan. 1881)」と繰り返した。

ゲームはそんなメロドラマのように全ての人の命を救うわけではないかも知れないが、人生の質をきっと高める。Sportは250ヤード走を含むダブリンのRichmond Lunatic Asylumが開催された日の記事を載せた。

何年間にもわたり自分は法王であると信じ込んでいた哀れな収容者は、カナリーグローブをつけた印の出現によって、愉快なことが引き起こされたが、合図の前にそれを脱いでしまった。彼は息切れしながら4着に終わったが、我々の記者に

向かって「グローブを脱いでなければ必ず優勝しただろう」と述べた。また、他のある収容者が「法王はみんな太りすぎだ」と皮肉った。(Sport, 3 Sep. 1881)

実は、それが彼の敗北の本当の理由だった。しかし、このような興味深い記事を通して Sportが真剣にしようとしていたことは、1,014人の患者のほとんどをかんぬきのかかった窓のある部屋に収容させることや拘束服を着させることをめったにしない、進歩的な体制をとっている保護施設に光を当てることで、精神的な病気の不名誉をぬぐいさろうすることだった。

精神病の特徴を報道することから、この新聞がどのような利益を得られているというのは定かではないが、明らかに強いプロパガンダである。馬の牧場や競走馬、様々な種目に関する他の記事は、明らかに広告の販売を奨励するためだった。そのような記事は、アイルランドのスポーツ界の周辺に漂うお金の量を示した。ビリヤードやハンドボール、漕艇の賞金については少し述べられた。新聞の広告のページは、スポーツの商品化の拡大を証明した。ホテルや鉄道の会社は特別な額で掲載された。馬は飼育場のために宣伝された。銀細工師はどのカウンティのどんなスポーツの賞でもカスタマイズするために競争した。ビリヤードホールやゲームをするための用具の販売は、特別な飾りのついた狩り用具(The Ulster Overcoat)やレースの時間を計るための腕時計のことが報道された。Elveryのスポーツ店は、1,400のテニスラケットを購入したと報道した。CantrellとCochraneの店は、スポーツ愛好者へのアピールとして、スーパー炭酸ソーダを「世界の先進的なクラブに支給された」と報道した(Sport, 26 Mar. 1881, 2 Apr. 1881, 9 Apr. 1881 and 2 May. 1881)。製品と有名人の結合はすぐに生まれた。それを宣伝販売するにおいて、Sportは英国の偉大な騎手であるFred Archerが購読料を獲得し、「完璧な一品」として新聞を推薦することを表した(Sport, 3 Sep. 1881)。

特別版ではより多くの広告-特にダブリンのホース・ショーが集められ、宣伝することを願う全ての人々のことを除外しなければならず、定期的な記事を求めている読者に新聞は謝罪した(Sport, 27 Aug. 1881)。多くの点で、スポーツの報道機関はゲームや商業の組合の調停者だったが、Sportは単なる商売の広告板ではなく、アイルランドのスポーツ生活をただ映し出しただけでもなかった。それはスポーツビジネスを管理し、カウンティ・ウォーターフォードのTramoreの事例から、極端に欲張るとビジネスが失敗することを示した。ここには、地方の大会が衰退したのは「ホテルや馬の所有者、宿泊施設の経営者にお金をだまし取られた(Sport, 13 Aug. 1881)」からだと書かれている。

Sportはスポーツ界の中に公正な管理者になろうとし、その同質の精神をもっている人と手を組んだ。ベルファストのスポーツ大会に出場するために、ボートでウォーターフォードから向かったLarry O'Connorと共に感したが、全ての陸上競技大会は多数の英國からきた訪問客に溢れていたことが判明した。その訪問客はトレーナーやブックメーカー、「客引きやその類いの人々全て(touts, et hoc genus omne)」、「もしスペードが何か名前が必要なら、

我々は彼らが、賭けのために走り、それによって金銭を得、アマチュアだということに疑わしいやつらだと簡単に言う；前述のブックメーカーはその日、公言しているにもかかわらず（中略）彼らの無関心は全体的な人々の利益を進んで崩壊させた（*Sport*, 23 Apr. 1881）のような人たちで構成された集団で、「不公平なくじ」による参加者によって行われることを知るのみだった。*Sport*はブックメーカーを批難する機会を逃さなかった。例えば、祝い事のような調子で、ブックメーカーのMichael Costelloeは、酒を飲んでばか騒ぎしている間に500ポンド盗まれた（*Sport*, 7 May. 1881）などのような記事を報道した。

*Sport*はスポーツ活動の領域でもどっぷり浸かった。競技会でのハンディキャップやスタート、判定の最良の手段について記者（correspondents）に忠告を行った。それは手入れがなされていない地方のレースコースの整備のために毎年、1,000ポンドの寄附を集めるためにヨークの商業を奨励するキャンペーンを求めた。この商売により、少なくとも実業家は損失の倍の額を取り戻した。また、Great Southern and Western Railway社の企画したアイルランドで初の鳩レースに参加した。新聞社の事務所の窓に1週間展示されないうちに、優勝した鳩はLimerick Junction駅から*Sport*の事務所までを3時間27分で飛行した。

一般的に、新聞はそれ自体に参加するか、国中のスポーツを規則化しようとする試みの多くを支援した。英国の新聞について述べたTony Masonの指摘は、アイルランド-そして、特に*Sport*に-にも当てはまるようと思われる。それらは自由な宣伝方法を作り、イベントを描写し、結果を掲載した。初期には、景品も提供した。スポーツとメディアの融合は、憎しみなしでは成し遂げられず、特にどちらが主導権を握っているかについては異論が絶えなかった。それでも、スポーツのルールの束縛の中でメディアによって話され、一般の人々に販売されたほとんど神話の偉業を行う英雄的な人々に満ちたスポーツ界との相互的な利益を否定することは難しい。アイルランドでは、1880年代から、報道と新聞は求愛を簡単に楽しんでいた。しかし、これは単に商売や利便性によって行われた状態ではなかつた。新聞に書いた人々は、スポーツの心からの支援者だった。これは純粋な人の機関で、スポーツを愛する人々はスポーツを書くことも好んだ。

An intelligent horse, a snowball fight and some languid loving 知的な馬、雪合戦そして熱意のない愛

スポーツはゲームや競争の範囲を超えたレジャーの幅広い世界の中にもたどり着いた。イングランドから「名士」と称された人々が蒸気船で往来し、アイルランドの劇場でショー やミュージカルが行われたことを報道した。ダブリンのRotunda Gardenでのサーカスのおもしろい記事は、それがライバルのEnglish Opera Companyによって上映されたにもかかわらず、たくさんの観衆を集めたことを述べた。そして、その興行はGaiety Theatreでも行われた。明らかに、アリアは、*Sport*が「一組のロバの演出」が「最も魅力的なパロディー」となったと評した偉大なスターの競争相手になれなかつた。サーカスは、「美しい鹿毛の雌

ロバは、人を疑わない従順な知能を見せた(*S Sport, 14 May. 1881*)」という安っぽい笑いだけでは続かなかった。観光事業とスポーツイベントの発達していくつながりも、記録された。カウンティ・クレアのMiltown-Malbayレース大会委員会は、地方のホテル経営者と鉄道会社に、観光客の料金の割引を申請し、新聞は「Spanishpointの200ヤード以内には、素晴らしい湯治場があり、KilkeeとLisdoonvarna、モハーの段壁から12マイルも離れていない(*Sport, 2 Jul. 1881*)」と報道した。釣りの記者のGreendrakeは、英国人や大陸からの観光客がアイルランドの湖や川で釣りをするために来ていること、ボートを借り地元の釣り人を雇っていること、そして釣り道具を購入していることを書いた。彼は、地元の人が川の漁獲高をあげるための「人工的な養殖の方法」がどういったものかを観察し、全ての釣り人にウィックロウ山脈のLawler婦人の宿を訪れるなどを勧め、「彼女は釣り人専用の宿泊施設を別に建てている。その宿よりもいいお茶をだすところは、このカウンティにほんどない。*(Sport, 16 Apr. 1881)*」Greendrakeは後に、どうしてほとんどのアイルランド人は自分のようにせず、休日を家で過ごすことを嘆いた:「アルプス越えの指導を受ける多くのアイルランド人は、モンブランの頂上に最短距離でたどり着こうとし、Lugnaquillaのある場所もわからないし、おそらくGlenmalure谷のことを聞いたことがないだろう。*(Sport, 13 Aug. 1881)*」

アイルランドの観光客がウィックロウで見落としたことは、アイルランドのスポーツを無視し、この国を特徴づけるスポーツの伝統に関わることを望まずに、アイルランドの歴史家になるのと同じことである。政治や宗教がユニオニストとナショナリスト、カソリック教徒とプロテスタント教徒に分断することに取り付かれたアイルランドの歴史家は、国のスポーツの過去を説明するために全体の統合を考案した。彼らがスポーツについて言及する場合に限り、全ての他のスポーツ組織を排除するゲーリック・アスレチック・アソシエーション(GAA)を取り上げている。さらに、GAAについても、政治的な観点以外の評価がされず、立派な研究といえるものに値する研究は見当たらない。主要な例は、Roy FosterがGAAを「民族統一主義者」「排他主義」「島国根性」「派閥的」として特徴づけたことである(Rouse, 2003)⁵。成熟した見解として提出された、GAAメンバーの小さな部門の政治的な活動がまるで同質の統一体として組織全体に移された前述の論評は、政治と文化の解放プロジェクトとのみ結びつけられた。必然的に、アイルランドの全ての組織や運動は、それを形成した人々や、形成された環境の政治的なアイデンティティによってある程度の影響を受けた。さもなければ、最後に、提案することは馬鹿げているし、*Sport*の特徴的な記事の政治的な側面もある。しかし、アイルランドのスポーツ界の駆け引きばかりに焦点をあてることや、アイルランドのスポーツを単なるフィーニアンとサクソンの組織に関連付けることが過度に単純化されている。

新聞に掲載された最初のフットボールの試合の報告がその一例である。1881年の元旦、*Sport*は、Gitanosと呼ばれるチームが、LongfordとRoscommonのカウンティから来たチームと試合をするためにLongfordの西へやってきたことを報道した。

農夫たちに素晴らしい楽しみを与えるフィールドに足の半分ほどの雪が積もっており、彼らはすぐに一般的な海のブイと同じ大きさの雪の玉が散りばめられているところに移動し、他の小さな大きさの雪の玉は、ふざけて敵を攻撃するミサイルとして使われた（中略）最初のRoscommonの男がタックルされ、投げ飛ばされるまで全ては上手く行っていた。これは、これまでゲームを見たことのない農夫の思い違いが、自分に対する攻撃と勘違いし、「Roscommonの男が敗れるのをみていない」という人々がグラウンドになだれ込み、数人のダブリンの男を叩きのめした。当然、Roscommonの選手は、ビジターチームの役割を演じたが、至る所の殴り合いを止めるのは困難だった（中略）試合の進行中、いくらか殴り合いが起ったが、RoscommonでプレーするDr. Cochrane, JPやCaptain Jones, JPの仲裁で、厳肅なものになった。ビジターチームのO'Kelly氏とMcIntosh氏はプレーすることができないほどの怪我をした。アンパイアによると、試合の結果は、Roscommonが相手の1ゴールに対して2ゴールで勝利した。ビジターチームは、Longford Arms HotelでStrokestown FCによる素晴らしい夕食をもてなされた。一般的な挨拶の後、他の乾杯の挨拶は退屈で、McCarthy氏は「コナートのフットボールの発展とコナート地区のフィフティーンが毎年の国内地方対抗戦(annual interprovincial matches)で闘える日が来るこことを」と挨拶した。（中略）いくつかの素晴らしいスピーチや歌や暗唱などの後、ダブリンの男達は午前1時の列車で町に帰っていました。（Sport, 1 Jan. 1881）

もちろん、この報道記事の政治性に焦点をあてることは魅力的である。つまり、上述の記事において、忠実な人や平和の正義などの記載に政治的な文脈がみられる。しかし、それよりもこの記事はアイルランドの都市部と農村部との隔たり、そして、農村社会の人々の間に存在する隔たりについて明らかにしている。農夫チームは無教養の小作農によって構成されていた一方では、Roscommonのチームには、地主や医者、陸軍大尉など高い地位の男ばかりが入っていた。

明らかに、アイルランドの農村部では、階級がはっきりとその姿を露わにしていた。この記事の3年以内にGAAの成長が現れた。もちろん、この記事からも、どのようにアイルランドの農村部がGAAを支持したかを見ることは難しくない。GAAは農村部にアスレティクスやゲーム大会を運営することによって、ヴィクトリア時代のスポーツ革命の枠の入りきれなかった農村部の人々の間に直ちにすさまじい人気を勝ち取った。スポーツの政治も重要な要素だったが、Hunt氏が提示したように、それほどの問題にはならなかつた。「外国」のゲームと「ゲール人」のゲームの間に後に起きた隔たりは民族的でカソリックの狂信者の自衛のために巻き起こしたという単純な考えは、日々の生活の本質の成熟した理解を否定することである。そのような狂信者は、排他性をもつ組織を生み出そうとしたかもしれないが、この場合、彼らだけが原因ではなかつた。隔たりを生み出すことは、いくつ

かの共同体がその隔たりの誕生を支援していた。そして、それは単に政治的な理由ではなくて、社会的な理由の結果だった。

政治を越えて、新聞が一般性を要求する以上、*Sport*はその時代の価値から抜け出せず、一貫性がないという問題を持っていた。1881年7月16日に、地方の人々は英国人がアメリカ人のL. E. Myersに敗れそうになった際、トラックに侵入し Myersが英国での競走で勝つことを妨害されたことに対して、痛烈に非難した。*Sport*はこの無作法なふるまいを嘆いたが、たとえ大衆の大部分が彼に罵声を浴びせても、彼がトラックを去る時、紳士的な人々が Myersに拍手を送ったことを指摘した。耳障りな声で罵声を浴びせる大衆のリーダーに堂々と立ち上がったことが、翌週に *Sport*に掲載された。

Myersの顔色はとても悪く、唇はふくれ、顔の毛は短く黒い口ひげだけだった。

彼の顔には、知性も教養も感じられなかった。彼は明らかに、アマチュアアスリートの下層に属する人物である。

同じ記事には、同じアステティック大会の幅跳びと高跳びで勝利したPat Davinが、アイルランドのアスリートの「最高の上品さ」や「謙虚さ」というように対照的に描かれている。

試合での人々の記録として、新聞には輝きがある。*Sport*はアイルランド社会が土地戦争や暴動を見落としていることを示し、都市や田舎のスポーツグラウンドは社会に参加することと根本的に同じである。支配者が金銭や楽しみのためにスポーツを行ったけれども、周りには裕福なヴィクトリア時代の人々が盛んに集まっていた。女性の参加は全てのスポーツの全ての記事に必須だと思われなかった。遠征に来た英国のチームと College Green で行われたクリケットの試合は選手にとって待ち遠しかったが、「女性にとってその三日間は遊歩する3つの素晴らしい日で、Le Folletの最新の流行を最も素晴らしい化粧で着飾って楽しんだ」(*Sport*, 14 May, 1881)。一方では、Ringsendのレガッタで、「聖パトリックに敬意をもった女性の衣装だった(*Sport*, 18 Mar, 1881)」と報じられた。

スポーツの場面で女性が出現しないことさえ重要なことだった。特に、自分の雄姿を見せつけたいと張り切っていた男たちにとっては残念なことだった。カウンティ・ケリーの Ballyseedyで行われたポロの試合を *Sport*は以下のように報じた。

第48連隊のEllice大尉は、Mr. Blennerhassettと試合を行ったが、我々はCoreleaから始めた時、危険な偶然-彼が乗っていたポニーが逃げ出し、針金のフェンスを飛び越えようとし、勇敢なキャプテンを放り投げ、肩を脱臼させたこと-に彼が遭遇したことを残念に思う。ポニーは針金に絡まり、そこから抜け出させるのは困難だった（中略）事故の結果、その光景の間、客車で彼女らの数人は準備できていたけれど、その場に女性がいなかつことを我々は残念に思う。（*Sport*, 18 Mar. 1881）

それは活動というよりも、女性を呼び込むための舞台装置だった。新聞のページに現れる多くの女性は、適した運動競技の努力とみなす確信が不足しており、同様にスポーツをする男たちの同属偏重思想や時代の社会基準を示している。英國の場合、女性に適したゲームと適さないゲームという考えがある。過度のスポーツ活動は子を産む女性の能力を落とすという観念が受け入れられていた。全ての表出する医学の抵抗として、制度化された見解は、女性の可能性よりも女性の肉体的な限界に焦点を当て続けることだった。「アスレティシズムの礼賛」は、明らかに男勝りだった。その礼賛像に関して、スポーツをする男たちが求めるべき-力強さ、強健さ、たくましさ-身体は、そもそも女性が避けたいものだった。スポーツをする女たちを奨励し、真似る傾向は広がった。その滑稽な書き方にも関わらず、*Sport*は前述のように、少年たちと特別な場合のためのブランデーを飲まず、スポーツの内容の女性の短所を口やかましく言わなかった。しかしながら、一般に女性が敬意をもって扱われることはまれだった。新聞はどうしても、その周りにある全てが行われることの作り話と結びつけられた。これはショードラッグだった。Fitzwilliam Squareでのアイルランドのテニス選手権で、記者は完全に自分を見失った。

ファンションや美は、重々しく歩くか、静かな口論の闘技場に似合っていた；調べの美しいメロディーが幸福な空気で満たし、輝く太陽が午後4時まで「白のナウシカ」を好んで行う素晴らしい野外劇場を照らした。紳士の独身者が身を寄せ合っており、劇はよりすばらしく-まったく感動的に-なった；そして女性の競争相手が中庭の柔らかい緑に上品な動きで加わり、出席者に見せたかった魅力的な場面が終わった。母、兄弟そして「おそらくおいつそう近い人そして敬愛する人」は妖精のような身軽な動きで不安な目つきで見ており、上手にボールを扱い、再び、柔らかい手首をかわいくねじりそれをもどした（中略）クリケットは男性に限定されているが、ローンテニスは女性が加わることができ、茶の間の快適さが野外の楽しみに加わった感じだった（*Sport*, 28 May, 1881）

しかし、これは何千語も連ねて書かれた記事の一部である。5日間のチャンピオンシップは詳細に記録され、高圧的な語調は、始めから終わりまで変わらなかった。それが高圧的な部分において、そこには皮肉や陳腐な決まり文句はまったくなかった。アイルランド王の代理の出席や軍人のあいさつ、真の容赦ない言語の力の息切れした報道は、記事を間違なく古くジャーナリズムの学校のものにした。新聞は大衆メディアに移行しつつあつたが、記事を書いた人々の多くは、特權的なエリートと結びついたままだった。そのエリートは中産階級が富と権力を手に入れても弱まるることはなかったが、スポーツや新聞の変化した姿の新しい家にたどりついた。英國の発展と平行して、古い集団と新たな富が多くのスポーツの統率と結びついた。家と土地と商業の協調は、拡張する郊外のラグビー・テニスやゴルフのクラブで急速に進んだ。中産階級は古いスポーツを行っていた紳士階級の組

織から合法性を取得し、金持ちは金持ちを見つけた。その紳士階級は未熟な成り上がりものたちを認めておらず、認めている人々でさえも新たな時代の包囲をまったく否定できなかつた。最終的に、その包囲は人々が考えていた以上のこと引きだした。

No Apes, no angels, just athletes

サルでもなく、天使でもなく、ただアスリート

その最初の年で、新聞は裕福な人々のスポーツを中心に扱った。これらのスポーツに光を当てることを求めるが、それが投げかける陰が、調査によって多くの世界を開けた。長年、*Sport*のページの光と陰の変化は、アイルランド社会の変化を反映した。1881年、近代アイルランドのスポーツ組織の完全な夜明けの数時間前に、この新聞は、組織化されたスポーツへの爆発的な興味を表象した。アイルランドは変化しており、スポーツ界はその変化によって作り変えられた。英国のスポーツ革命の過程はアイルランドをそのままにしておいたわけでは決してない。新聞の確立は、スポーツやその中味を伝え、翌年には、アイルランドのスポーツの発展を記録し、影響を与えた。

新聞は時間がたつにつれ発展する。1880年以前、一貫してスポーツのことを扱うアイルランドの日刊紙はなかった。例外的な場合-ボクシングの試合や競走大会、その他-は、報道されたが、読者を移すほどの定期的な特色はなかった。たびたび、スポーツ大会だけが関心のあるコートでの大会で号外を作った。スポーツを読むことへの関心は、もはや疑いようもなかった。19世紀終盤と20世紀初頭を通して、日刊紙はスポーツの報道量を大きく拡大した。最終的に、このことによって1880年代から成長していたスポーツ紙を消滅させた。*Sport*は、それを生み出した新聞であるFreeman's Journalが廃刊となった1924年をすぎても継続した。そして、それは無期限に続いたわけではなく、1932年にその最後の時を迎えた。しかし、*Sport*は、その栄光の日々の輝きや独創性は記憶される価値がある。1880年代、スポーツジャーナリズムがまだ、ありふれた文句の退屈な列挙に陥っていた頃、この新聞は新鮮な語り口によって、素晴らしい記事を書いた。前例のない時代の特徴を、活力と情熱とともに書き上げた。英國の一般紙が舞台のアイルランド人と彼のサルの親友によって人々を魅了していたころ、*Sport*はその存在全てがより重大になっていた(Curtis, 1971)。その素晴らしい記事に、*Sport*は、サルでも天使でもなく、アスリートとしての魅力的なアイルランド人たちの肖像を描いた。

本稿はAlan Bairner編著の*Sport and the Irish* (2005) の第一章 ‘Sport and Ireland in 1881’ を訳出したものである。第一章の執筆者であるUniversity College DublinのPaul Rouse氏の許可を頂き翻訳に至った。本研究は、GAAが設立される3年前、1881年のアイルランドのスポーツ状況を新聞*Sport*により概観している。氏が指摘するように、これまでのアイルランドのスポーツ史に関する研究は、政治・文化的に特徴のあるGAAに焦点が当てられ続けて

いる。本稿はGAA設立以前のスポーツ活動について新聞から明らかにしようと試みている。賭けの新聞として大衆に広まったSportが、賭けの予想記事と合わせて近代スポーツをアイルランド全土に紹介したことを想像させる。近代スポーツの伝播という点では、印刷機の登場や鉄道網の整備などが不可欠であったといえよう。

本稿は榎本が試訳を作成し、日本=インドスポーツ史研究者であるダワリカル氏との調整により完成させた。Rouse氏独特の言い回しがあり、上手く翻訳しきれなかった点が多々ある。敢えて筆者が本稿の翻訳を行ったのは、これまでGAAスポーツと英國スポーツの政治や文化の観点で描かれてきたスポーツ史において、氏が行った政治性を乗り越えたjust athletesという視点を改めて持つことに意義があると考えるからである。これまでの近代スポーツに関する指摘は、ナショナリズムと結びつけて語られることが多く見られる。強くナショナリズムと結びついたと評価されるアイルランドのスポーツ史研究から、近代スポーツとナショナリズム、スポーツを行っていた民衆について問い合わせ直すことは可能ではないだろうか。

注

- 1 英国の近代スポーツの誕生や続いて起る世界への伝播に関する文献は、例えば、R. Holt (1989), *Sport and the British: A Modern History*. Oxford: Clarendon; N. Tranter (1998), *Sport, Economy and Society in Britain, 1750–1914*. Cambridge: Cambridge University Press; D. Brailsford (1992), *British Sport: A Social History*. Cambridge: Lutterworth Press; W. Vamplew (2002), *Pay Up and Play the Game, Professional Sport in Britain 1875–1914*. Cambridge: Cambridge University Press; N. Elias and E. Dunning (1986), *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process*. Oxford: Blackwell; J. Hargreaves (1986), *Sport, Power and Culture: A Social and Historical Analysis of Popular Sport*. Cambridge: Polity; W. J. Baker (1982), *Sports in the Western World*. Totowa, NJ: Rowman & Littlefield; A. Guttmann (1995), *Games and Empires: Modern Sports and Cultural Imperialism*. New York: Colombia University Press; R. Holt (1981), *Sport and Society in Modern France*. London: Macmillan; R. Guha (2002), *A Corner of a Foreign Field: The Indian History of a British Sport*. London: Picador; J. A. Mangan (ed.) (1991), *The Cultural Bond: Sport, Empire, Society*. London: Frank Cass; J. Lowerson (1993), *Sport and the English Middle Classes 1870–1914*. Manchester: Manchester University Pressがある。
- 2 1845年と1910年の間に、農村の労働者数は、少なくとも700,000人から300,000人に減少した。さらに、同時期に、5エーカー以下の小農数は、300,000人から62,000人に減少し、5エーカーから15エーカーの土地所有の農家数は、310,000人から154,000人に減少した。1870年はたった3パーセントであった土地所有者が、1916年までに、アイルランドの農業従事者の64パーセントが土地所有者となった。P. Rouse (2000), *Ireland's Own Soil: Government and Agriculture in Ireland, 1945–1965*. Dublin: Irish Farmers Journal参照。
- 3 アイルランドの幅広い社会的、経済的な変化の文献は、例えばT. Guinnane (1997), *The Vanishing Irish: Households, Migration, and the Rural Economy in Ireland, 1850–1914*. Princeton, NJ: Princeton University Press; J. J. Lee (1973), *The Modernisation of Irish Society, 1848–1918*. Dublin: Gill & Macmillanがある。アイルランドの近代スポーツ組織の初期の発展については、J. S. Donnelly and K. S. Miller (eds) (1998), *Irish Popular Culture, 1650–1850*. Dublin: Irish Academic Press; O. MacDonagh, W.

F. Mandle and P. Travers (eds) (1983), *Irish Culture and Nationalism, 1750–1950*. London: Macmillan; T. West (1991), *The Bold Collegians: The Development of Sport in Trinity College, Dublin*. Dublin: Lilliput; P. Meenan (1997), *St Patrick's Blue and Saffron: A Miscellany of UCD Sport since 1895*. Dublin: Quill Print; W. F. Mandle (1987), *The GAA and Irish Nationalist Politics, 1884–1924*. Dublin: Gill & Macmillan; P. Griffin (1990), *The Politics of Irish Athletics, 1850–1990*. Ballinamore, Co. Leitrim: Marathon Publications; A. O Maolfabhl (1973), *Caman: Two Thousand Years of Hurling in Ireland*. Dundalk: Dundalgan Press; M de Burca (1999), *The GAA: A History, 2nd edn*. Dublin: Gill & Macmillan; L. P. O Caithnigh (1980), *Seal na hIomana*. Dublin: An Chlochomhar Tta; B. O hEithir (1991), *Over the Bar*. Swords, Co Dublin: Poolbeg; S. O'Riain (1998), *Maurice Davin (1842–1927). First President of the GAA*. Dublin: Geography Publications; J. J. Barrett (1997), *In the Name of the Game*. Bray, Co. Wicklow: The Dub Press; T. McElligott (1984), *The Story of Handball: The Game, the Players, the History*. Dublin: Wolfhound; N. Garnham (ed.) (1999), *The Origins and Development of Football in Ireland*. Belfast: Ulster Historical Foundation; T. S. C. Dagg (1944), *Hockey in Ireland*. Tralee, Co. Kerry: The Kerryman; N. Mahony and R. Whiteside (1992), *Hockey at the King's Hospital, 1892–1992*. Maynooth, Co. Kildare: Cardinal Press; W. H. Gibson (1998), *Early Irish Golf: The First Courses, Clubs and Pioneers*. Naas, Co. Kildare: Oakleaf; W. P. Hone (1956), *Cricket in Ireland*. Tralee, Co. Kerry: The Kerryman; and F. A. D'Arcy (1991), *Horses, Lords and Racing Men: The Turf Club, 1790–1990*. Curragh, Co. Kildare: Turf Clubがある。

4 *Freeman's Journal*は1763年9月に創設され、1924年の1月19日まで続いた。

5 Roy Foster (1993), *Paddy and Mr Punch: Connections in Irish and English History*. 参照。Joe Lee (1973), *The Modernisation of Irish Society 1848–1918*には、スポーツに関する言及が一切ない。これらは2つの事例だが、近代アイルランドの歴史家が繰り返す傾向である。